

# 林業と地域興し 関係と価値観の連続性の回復へ

矢房孝広

ふるさととの喪失

便利さ快適さを求めて都市化する生活の中で、自然の季節感を感じにくくなって久しい。都市はもちろんのこと、田舎で自然がいつぱいのつもりが、目の前の木々や生き物は本来の姿を失いつつある。

地方の時代が叫ばれ、特にバブル崩壊以後のここ十年は、平成不況の中、異常な低金利に行き場を失った資金が、景気回復と地域振興という虚飾の大義名分の元に地方にばらまかれた。本来地域の特性を生かした地域の自立に使われるべきであった資金は、民活、リゾート法などという耳に心地よい幻想の旗振りに、吾を失った自治体によって、テーマパーク、博物館、美術館、ホテル等、

規模の大きな自治体を」と、期間限定の交付金など一時しのぎのアメがぶら下がる合併促進政策。自治組織を維持したいと「非合併」を選択した自治体は、即座に交付金をうち切るムチを振るわれる。みな顔色をうかがいながら、「自主的に判断する」ために、コロコロと変わる仮定の前

提条件をもとに「マニュアル」や「シミュレーション」の数字をつくり、議会を動かし、職員を張り付け、もつと重要であるはずの課題に手を付けることができずに、経費と労力と時間を浪費している。

今地方は、少子高齢化の中で大きな借金返済問題だけではなく、住民の福祉、コミュニティの維持など、地域づくりという重要な課題を抱える。少子高齢化した社会において、住民の生の声を真摯に受け止めて、明日を考え、自らの道を選択するという困難さわまりないこの課題は、合併するしないに関わらず、どんなに小さくても、そこに集落があり、人が住む限り存在し、避けて通れない本質的な問題となる。しかも、その対策を取るのに、もはや一刻の猶予のない状態まで来ていると言える。

ドイツのこと

地域づくりで鮮烈な印象に残っているのが、二〇〇〇年ハノーファー万博のランドスケープデザインのシンポジウムに参加したときのことである。ランドスケープデザインは、「景観づくり」と訳すようだが、彼ら地では地域づくり、村づくりのソフト的なものも含めてとらえていた。それは、田園風景の保存や修景のみではなく、自然とシステムや労働、技術や文化などの要素とその関係をいかに構築して、地域振興するかを考える内容になる。

そこで最も印象的だったのは、ドイツの農村でも、都市への人口流入による過疎化と農家の高齢化による後継者不足でコミュニティが衰退し、森が維持できなくなりつつあるということであった。考えてみれば当たり前と言えなくもないが、改めてその問題の大きさを感じた。「日本はダメで、ドイツはすばらしかった」などというありきたりの話ではなく、日本とまったく同じ構図状況の中、都市市民と大学、学生そして村人が「地方はいかにあるべきか」という問題を真剣に論じていたことが心に残る。

◎ 矢房孝広(やぶさ・たかひろ)  
宮崎県諸塚村企画課長補佐  
エコミュージアムもろつか館長

数多くの虚塔に変わった。日本全国デイズニードランド化構想とも言える幻想のオンパレードである。その結果残ったものは、多額の借金と維持管理費がかかり活用に頭を痛める施設、そして公金に頼り、自立できない第三セクターである。もちろん多くの有益な施設や健全な組織があるのは事実だが、国と地方自治体の借金は、財政投融资事業のものも含めると一千兆円にのぼるといふ。これに第三セクターの隠れ借金を加えると国民一人あたり借金一千万円を超えるとしてつもない数字が見えてくる。

当然自治体は財政難となり、今度は一過疎の農山村は金がないのだから自治体ではない。合併して数万人

その講演で聴いたウィーンの大学教授が面白い話をしていった。美しい風景の農村で服を泥だらけにして懸命に働く農民の姿を、燕尾服で正装した画家が絵に描いている写真を示し、それをアンバランスなものだと笑い、無神経な画家だと批判することとは簡単だが、その画家がいないと農村の厳しい現実とその風景の美しさは伝わらない。大切なのは都市と農村とを対立するものにとらえず、分断されたものをスムーズにつなげることだと彼は言った(ようだ)。

### 諸塚のこと

私の故郷であり、現在住んでいる村、諸塚村は、山林が95%を占める



諸塚村産直住宅の家づくり塾見学会

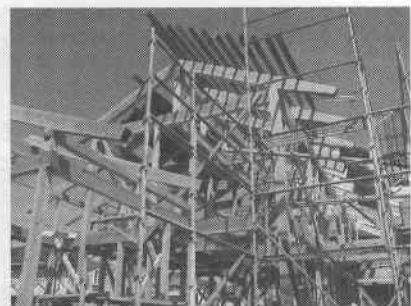


林業家と施主の出遣い

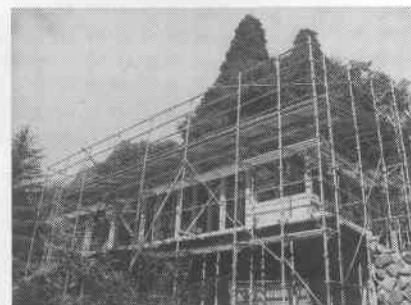
森深き山村である。当然ながら過疎化高齢化は進んでおり、人口わずか二二〇〇人、周辺自治体よりまだましとはいえ高齢化率30%を超える。この村は昭和三〇年代に林業立村を宣言している。林業立村を掲げ、森林理想郷を謳い、全村森林公園化を目指している。それは小さな山村だけではできないけれど、都市民と



木材産地ツアー-山林現場見学



諸塚村産直住宅 M邸



諸塚村産直住宅 I邸

一体となつて、森を守り、森に生きる人を応援し、街で暮らす人の心のふるさとづくりを、時代の流れとともに形を変えつつも模索している。

林業はもはや産業ではないと言われる平成のこの時代に、林業家の夢のある将来像を描くことは、山だけでは困難である。しかし、まちを含めて多くの人々と協力して連続性のある社会を生かすシステムの実現を目指すことで、森を守る村、地球を守り、「人の心の豊かさ」の拠りどころとして欠くことのできない村が存在しうるのではないかと。

そんな思いで都市とのネットワークを結んで森を守ろうと、平成九年から産直住宅に取り組んでいる。無

駄な輸送エネルギーを使わず、地域の素材を活かし、そして都市と山村が連携して「木の家づくり」をするため、九州限定の供給をしている。持続可能な林業を前提に、無理をしないで少しずつ積み上げ、「自分が育てた木を使っている」と村民が誇れる家が、平成一五年度末で九州に七〇棟を数えることになった。

### 連続性の回復しつつなぐということ

地域社会は、高速交通網の発達と流通の高度化で、コミュニティ機能を失った。かつて地域には、それぞれ独特の自然条件や生活があり、そこに生まれ育つ人間と地域性には密接な分ちがたい関係が形成され

ていた。しかし、ほんの数十年でそんな「身土不二」の必然性がなくなり、ふるさととは代替可能で均質なものになった。ふるさとの概念が父の世代と子の世代ではまったく違っていいほど違ってしまった。高速道路や新幹線が開通しても、地方が豊かになつたわけではなく、都市への人口と資本の流出とが加速されただけである。入ってくるものも増えたが出ていくものもつと増え、結局地方は貧しくなり、都市資本に豊かさ集中する。集中することではじめて成長する経済システムの必然である。中小地方都市では、いまだに近代都市の残像を目標にしており、もつと豊かにとつて幻想のスローガンが本気で支持されている。

人間は関係の動物と言われるが、どうも人類全体がその最も大切な関係の連続性を失いつつあるのではないか。現代社会は、物質文明（生活様式、衣食住）の劇的な変化によって、豊かさと引き替えに歴史（というより関係）の連続性を失つた。なにより価値観があつたという間に大きく変わった。身近な親や子、孫でさえ価値観が違い、世代の断絶を起している。

我々にとつて最も身近であるはずの「食」についても、関係と価値観の連続性が失われている。ニワトリとトリニクがつながらない子どもたちがほとんどである。根底には「外食」や「中食」がシェアを拡大し、「食」が農よりも加工と流通を第一とするようになったことに大きな原因がある。「食」における原材料の重要性が著しく低下し、当然ながら農家は厳しい岐路に立っている。同時に社会問題化している食の信頼性崩壊の原因は、それとほぼ同根であることに気が付いてほしい。農山村だけでなく、都会の消費者にとつても厳しい時代なのである。

アメリカの牛肉BSE、アジアの鶏肉の問題は、結局どんな教訓を我々にもたらすのか。地球規模で食材を手配し、安いもの、美味しいものを買いたさつた結果、食料も自給できない貧しい国ができあがつている。最近よく耳にする地元食材を使おうという「地産地消運動」「スローフード」の本質は、多品種少量生産の自給自足システムである。大量生産のシステムのために、分断された単品生産農家だけの農業体制も必然的に見直さざるをえないだろう。

生きていくのに不可欠の食料を地域で自給するのは当然のことで、もつとと言うと食生活を地域性にあつたものに戻していくことも大事である。我々自身が、グルメブームなどに象徴されるメディアに踊らされ、地域にない食材を求める自らの姿勢を改めるべきであろう。

### 都市と山村をつなぐ

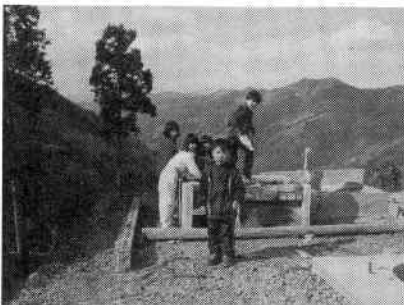
現代のメディアを支配するテレビの影響が、地方民の多くは、農山村は何もなく貧しいが都会は豊かな楽しいところだと思つているし、都市民は今の山村をゆつたりした詩的なもの（ノスタルジー）として認識しがちである。両者の視点は直接的には相反する。ただし、都市民の精神的な潤い、癒しには農山村は必要である。経済的に厳しい農山村自立へのバックグラウンド形成に都市の助けは不可欠である。

分断された都市と農村とを、いかにゆるやかにつなげ連続性を保ち、循環型社会を実現できるか。また、根源的な関係と価値観の連続性を回復させるには、自分たちのことを自分たちで理解することがカギになる。世代の情報交換、地域の情報交

換が生きる条件になるからである。それによつて認識のレベルで生活水準を自分のできる範囲内で維持することを理解するようになり、これがいわゆる自給自足体制となる。結果的に、入ってくるものは減るが出ていくものもつと減り、生活は安定する（それは決して閉鎖的なものではなく、今の社会にはむしろ超攻撃的なものになる）。

### 諸塚型エコツーリズム

諸塚は環境と共生する林業の村である。村では、産直住宅で培つたネットワークをさらに広げて、村全体が森と共生する諸塚型エコツーリズムを展開している。ないものねだり



山村で遊ぶ都会と村の子供たち

をやめ、地域資源を活かすエコツーリズムの手法を取り入れ、70年代までは当たり前だったあの風景と日本人の精神の支柱・ふるさとを守ろうとしている。大人も子どもも、自然と親しみ、身近な自然を見る目を養い、森林資源の大切さや価値を頭だけでなく、ここからただ感じる事ができる場所を、自分たちの手で創りあげようという試みである。

諸塚型エコツーリズムは、大きな箱物や規模を重視した一時的なイベントではなく、また補助金でつくられた接待する側される側の長続きしない一時的な交流関係とは一線を画す。あるがままの自然と村の祭りなどの生活文化をバックグラウンドに



都市親子のピオトープづくり体験



夏の下草刈りを体験することもたち

して、村民みんなが協力し、手づくりの交流を本分とする。

都市市民にとって心の触れ合うツアーとなるだけではなく、村民にとっても自分たちの生活や伝統文化の再評価の機会となることが重要である。自然との触れ合いもさることながら、人と人とが触れ合い、都市と農村とがお互い縁を結びあい、密度の濃い継続的な人間関係を大事にしている。

諸塚にあるもの、諸塚そのものの魅力をPRし、新しい形の交流人口を創出することが目標である。大きな一過性のイベントではなく、少数対象のオリジナル企画ツアーを柱にし、不便さを残しながら、現代的

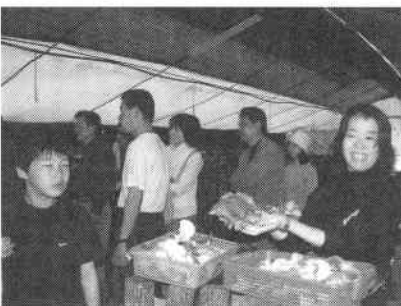
な感覚で昔ながらの生活が楽しめる施設を活用した体験がここにある。ツアー開催数はすでに100回を超え、それとは別のフリープラン体験や一般の「森の古民家」利用客も確実に増えている。何度も来村する根強いファンが定着してきているのには、最初は「こんな田舎で何も無いのにきてくれるかな」と心配していた村民からも驚きの声が出ている。

五年前から「環境を学ぶ旅」として小学生から大学や専門学校の学外研修の受け入れをしているが、その中では単に農林業の体験だけでなく、生活・文化の体験を重視している。地鶏さばきなど意識して「生き物」と「食」とを近づける体験メニューを用意する（概して環境教育では、現代社会で分断された循環系を認識レベルで回復させることが大切であろう）。子どもたちには予想以上に好評だったようで、涙が出るような作文やレポート、体験発表も見受けられる（詳細は諸塚村のウェブ

サイト <http://www.vill.morotsuka.miyazaki.jp>参照）。

「産直住宅」や「諸塚でやま学校しよう!」、「大豆縁縁倶楽部」、そして「環境を学ぶ旅」など、まちとむらと

を顔の見える関係でつなぐ「まちむら縁縁倶楽部」というネットワークができています。農林家と一般家庭とがお互い安心と信頼でつながるこのネットワークによって、「食」や「住」における関係と価値観の連続性を少しずつ回復させ、顔の見える小さな流通を主役にしようとする試みである。この「食」や「住」を始め、生活や食文化の中で連続性を回復した循環型社会は、まちやむらに活力を起し、必然的に「森林を守る」社会になることは言うまでもないだろう。将来的には、各地でこんな小さな流通がいくつもでき、本当の意味での地域づくりが実現できることを願っている。



木材産地ツアーでのシヤケ収穫体験